

腰部脊柱管狭窄症に対する漢方薬(エキス剤)の使用経験

○吉田 祐文¹⁾、松村 崇史²⁾

大田原赤十字病院・整形外科¹⁾、済生会宇都宮病院・整形外科²⁾

【緒言】腰部脊柱管狭窄症に対する薬物療法では消炎鎮痛剤、PGE1製剤などが一般的であるが、演者は漢方薬のエキス剤(以下漢方薬)も頻用している。腰部脊柱管狭窄症に対する漢方薬の使用経験を報告する。

【対象および方法】対象は1998年10月から2001年9月までの期間に腰部脊柱管狭窄症に対して漢方薬を投与開始した20例である。脊椎の術後の症例と頸・胸椎との明らかな重複病変は除外した。年齢は49歳から85歳、平均70歳、男性7例、女性13例であった。治療期間、漢方薬の投与期間、保存療法を選択した理由、漢方薬の投与方法、使用した漢方薬、日整会腰痛疾患治療成績判定基準(以下JOAスコア)の改善率、Visual Analogue Scale(以下VAS)の改善率、漢方薬を投与するに至った愁訴ごとの改善傾向につき検討した。

【結果】治療期間は3ヶ月から57ヶ月で平均18ヶ月、漢方薬の投与期間は2週から38ヶ月で平均9ヶ月であった。保存療法を選択した理由は全身状態を考慮した上で手術適応が無いと判断したものが10例、手術適応があると判断したもののうち患者が手術を希望しなかったものが7例、その他3例であった。漢方薬の投与方法は漢方薬を単独で使用しているものが5例、漢方薬と西洋薬を併用しているものが14例であった。使用した漢方薬は牛車腎気丸が14例、補中益気湯・芍薬甘草湯・当帰四逆加呉茱萸生姜湯がそれぞれ3例などであった。平林法によるJOAスコアの改善率は7例の平均が45%、VASの改善率は15例の平均が55%であった。愁訴ごとの改善傾向は、下肢痛37%、下肢しびれ31%、腰痛13%、下肢の冷え29%、殿部痛13%、下肢のつり100%であった。

【考察および結語】漢方薬の単独投与は西洋薬では効果が乏しい症例、西洋薬を希望しない症例などであり、併用投与は西洋薬である程度の効果は認めるがまだ不快な愁訴が残っている症例などであった。整形外科における症状の把握は腰痛・下肢痛・下肢しびれのようなJOAスコアの評価項目であることがほとんどであるが、実際には冷え・つりなどが主たる愁訴であることも多い。JOAスコアの改善率は平均45%と決して満足できるものではなかったが、VASの改善率は55%であり患者の満足度は高く、JOAスコアに反映されない愁訴の治療に漢方薬は有効であると思われた。